opusdei.org

## 待降節黙想:12月19 日

黙想のテーマ:「信頼とザカリアの恐れ」「沈黙の教え」 「神を信頼する」

信頼とザカリアの恐れ

沈黙の教え

神を信頼する

ザカリアとエリザベトは、「神の前に正しい人で、主の掟と定めを全て守り、非の打ちどころがなかった」

(ルカ1・6)。旧約が間もなく成就 されようとしています。救い主の降 臨を間近に控えている今、教会は、 この二人の信仰を考えさせてくれま す。聖ホセマリアは、イエスと親し く関わった福音書の登場人物たち と、度々、語らいました。「今朝、 聖エリザベトにすべてのことを頼み 始め、そしてすぐに、相手がその息 子ヨハネとザカリア、そして、聖 母、聖ヨゼフ、イエスに変わって行 きました。このような、主との付き 合いは、友人たちを通して認識の輪 を広げていく人間同士の友情のよう ですしい。

福音書を通して神に信頼することを 学びながら、近づいている救い主の 来臨を準備したいと思います。私た ちには、自分の経験やものの見方を より重視する多くの理由があるのは 確かです。ですから、ザカリアのた めらいがちな質問が分かります。 「何によって、わたしはそれを知る ことができるのでしょうか」(ルカ1・18)。この世的な確実性を求めましたが、神は沈黙でお答えになり、彼が主に長年お願いしてきたことが成就するまで、彼は唖(おし)になりました。

たぶん、洗礼者の父親は、そのよう な名誉が与えられるほど高尚でない ことを恐れたのでしょう。私たち も、参考や確実性、言い訳を探し求 めます。人間的に見て、この夫婦に は子供を授かる可能性はなかったの です。いつも同じようなことが起こ ります。私たちが自分自身を見る 時、神のご計画を台無しにしてしま うのでは、と考えます。自分が決定 的で不可欠な存在のように思え、恐 れは私たちを動けなくします。「私 たちは、人間的な手段の有効性と力 だけに頼る危険を冒している世の中 に住んでいます。こういう世界で私 たちは、祈りにおいてもたらされる 神の力を、見つめ直し、その証し人

になるよう招かれているのです」
「図」。今日の福音が招いているのは、
まさにこのこと、神に信頼すること
です。疑ったにも関わらず、ザカリアはガブリエルの告知を聴いて喜び
に満たされました。「恐れることは
ない。ザカリア、あなたの願いは聞
き入れられた」(ルカ1・13)。

ザカリアは、この沈黙の数ヵ月間に の沈黙の数りますがいまれた。 を学ぶろしを見たを見たを見たを見たなりませながままませなは になった。彼は崇って、熱心は大のの方ではは でもあいままがないまかいまかいまかのですると、 でいたがいないないでであるが、 でいたがいないないないないないないない。 でいたがいないでいるが、 でいたがいないないないないないないないないない。 でいたがいないないないないないないないないない。 でいたの男の先駆けとしての子どものの男の先駆けとしての子どもの。 生を、滞りなく準備するのに役立ったことが分かります。「すると、たちまちザカリアは口が開き、舌がほどけ、神を賛美し始めた」(ルカ1・64)。

ザカリアの喜びはいかばかりだった でしょう。その唖の期間には、言葉 なしで非常に深い意味をもつものに なる、多くの一般的な所作、まばた きや、なでたり微笑んだりすること などの価値をも、再認識したはずで す。エリザベトは、彼が言いたいこ とを推し量って彼に接していたで しょう。二人は、神が与えられた事 を、共に見つめそれを果たす事で満 足していました。彼らは、主のプレ ゼントを内密にし、静かにそれを味 わうことにしたのです。神は、言わ なければならないこと、つまり彼ら の熱望が聞き届けられたことを表明 されました。「近所の人々は皆恐れ を感じた。そして、このことすべて が、ユダヤの山里中で話題になっ

た。聞いた人々は皆これを心に留め、『いったい、この子はどんな人になるのだろう』と言った。この子には主の力が及んでいたのである」(ルカ1・65-66)。

ザカリアの人生経験は、私たちもま た、周りの人々や様々な出来事を通 して、神のご計画をよく知ることが できることを示唆しています。多 分、以前は、あまりにも自分自身に 耳を傾け過ぎていたので、理解でき なかったでしょう。「神の神秘を前 にしたら、信頼して沈黙すること、 その業を謙虚に静かにじっと見つめ ることです。神のわざは歴史を通し て明らかにされるものの、大抵それ は、私たちの想像をはるかに超えて いるのです!ぽん私たちが黙し、神 に耳を傾けるとき、ザカリアとエリ ザベトに起こったように、思いがけ ない時と所でも、神の祝福を感じ、 大きな喜びに満たされるでしょう。

たびたび、二人が愛し合うことは、 他人にあることを、すべきこととし て言わないことを含みます。愛する 人が自由に自分の思いを表明するた めです。愛情の表し方を命じたり強 要したりはしません。これに似たこ とが、神との関わりにおいても起こ ります。私たちは、神が、びっくり するようなことをしてくださること を期待します。恩恵は、予告なしに 訪れる自由で独創的なものです。ザ カリアは、神のイニシアティブの素 晴らしさを実感することができまし た。信頼することには、いつも報い があること、たとえそう思えなくて も、神は常に近くにおられることを 見出したのです。「私を信用しない でください。私はあなたを信頼して います。イエスよ、私自身を御腕に 委ねます。持っているものすべて、 つまり私の惨めさをお任せします|

幼子イエスのご降誕を、心を込めて 準備していますが、この聖なる人 に、彼のような信仰、希望、忍耐を お願いしましょう。希望が無くなっ た様な晩年に起こった奇跡まで、祈 り続けたその信仰、イスラエルにも たらされる救いを熱望するメシアへ の希望、そして、彼自身、忍耐強 く、確実性を神に求めることを学び ました。愛にはいつも危険が予想さ れます。保証することはできないか らです。それは私たちを愛している 方のみ旨に依ります。ですから、神 だけに託さなければならない時、心 配な時、ザカリアに助けを願いま しょう。主は私たちの確実性です。 聖テレサは、わずかな言葉で、しか し、断固とした証言を残していま す。「神の善良さに注目しなさい。 友だちを見捨てることは決してあり ませんしたる

「福音書では、『恐れるな』が何度 も繰り返されます。まるで、人間に 対する神の決まり文句であるかのよ うです。人間は、原初から、罪のた めもあり、神を恐れてきたからで す。アダムは罪を犯した後に、『恐 ろしくなり、隠れております』(創 世記3・10)といいます。ベツレヘム は、恐れに対する解毒剤です。人間 の『いいえ』にもかかわらず、神は いつまででも『然り』と言っておら れるからです。永遠にこのかたは、 わたしたちとともにおられる神だか らです。しかもご自分の存在で恐れ を抱かせることのないように、柔ら かな幼子になられます | [6]。愛情深 く優しい主に信頼することができま すように、また、神をコントロール しようとせず、愛に満ちたその驚く べきみ摂理に委ねることができます ように、聖母に助けて頂きましょ

う。

[1] ハビエル・エチェバリア『福者ホセマリア・エスクリバーの思い出』(Memoria del Beato Josemaría Escrivá, Rialp, Madrid, 2000, p. 259)。

[2] ベネディクト十六世、一般謁見 演説、2021年6月13日。

[3] フランシスコ、「お告げの祈り」でのことば、2018年6月24日。

[4] 聖ホセマリア『道』113番。

[5] イエスの聖テレサ『自叙伝』11,4。

[6] フランシスコ、説教、2018年12 月24日。

pdf | から自動的に生成されるドキュメント https://opusdei.org/ja-jp/meditation/mokusou-taikou-19nichi/(2025/12/13)